

## 第22回全国大会

(2022年11月19日(土)、於 早稲田大学戸山キャンパス・Zoom併用)

### 要 旨

#### I 研究発表

##### 第一室

##### 1. *Girl's Own Paper* と *Girl's Realm* における読者の役割

牟田 有紀子(城西大学)

19世紀末から20世紀初頭、イギリス少女雑誌は読者の獲得のために試行錯誤を重ねた。毎号投書と呼びかけ、読者ページには読み手である少女たちの自主的な参加を歓迎するための交流の場を設けた。とりわけ、*Girl's Own Paper* (1880-1907) と *Girl's Realm* (1898-1915) は、そのような交流ページを、少女たちの教育や娯楽、あるいは雑誌そのものの宣伝としても活用した点が特徴的である。この二誌はそれぞれ1900年に慈善団体を組織して、有料会員になった読者は様々な慈善活動を行い、その成果を紙面で報告しあった。時にはどのような活動をするか、集まったお金を何に使うかも読者が決めた。本発表では、この活動が慈善活動を推奨するという当時の一般的女性教育の役割を果たすだけでなく、娯楽を織り交ぜて読者同士の勧誘を推奨するなどして、読者の主体的な参加を促す機会を提供していることを指摘した。雑誌と読者はこのような活動を通して互いに利益を与えあう関係を構築していることが明らかになった。

##### 2. *A Handbook for Travellers in Japan* に見られる小川一真の影響

清水 由布紀(津田塾大学)

19世紀は旅行が世界規模で行われた時代であった。多くの旅行者の旅の指針となったのが、ガイドブックである。中でも当時高い人気を誇ったのが、マレー社(John Murray)が発行している *A Hand-Book for Travellers* シリーズである。この日本版である *A Handbook for Travellers in Japan* は学者

が自主的に作成したものをマレー社が取り込んで成立したシリーズで、著者の権限が大きい。筆者のチェンバレンは情報を得るために写真集も参考にしたことにより、写真に映えるような地域がより注目されることとなった。この写真集を手掛けたのが小川一真であり、彼は第4版の発行人になった。日本の出版法により、第4版では*A Handbook for Travellers*というイギリスの出版社の著作にも関わらず、日本人である増島六一郎が版權を所有することになった。*A Handbook for Travellers in Japan*はイギリスだけでなく日英両方の視線の交差とマーケティングにより5000部以上のヒットに繋がった「もっとも対象国と繋がったガイドブック」なのである。

## 第二室

### 1. 男たちのゴシップ——『ヘンリー・エズモンド』における『スペクテイター』に関する考察

岡本 佳奈(東京大学大学院)

本発表では、W・M・サッカレー『ヘンリー・エズモンド』(1852)において日刊紙『スペクテイター』が男性のゴシップ媒体として果たす役割を考察した。本小説は主人公ヘンリーが腐敗した貴族社会を脱し、道徳的な家庭を得る事で幕を閉じる。18世紀を舞台としつつ、結末には自立性と家庭を重んじるヴィクトリア朝的な中流階級男性像が確立する。この過程での障壁となるのがヘンリーの思い人、奔放なビアトリックスの存在である。物語の終盤、ヘンリーは『スペクテイター』を偽造し、彼女のゴシップを掲載する。これはビアトリックスを貶め彼自身を英雄視させるための行為だが、「スペクテイター氏」との対話を通じて女性のゴシップを広めるというヘンリーの非英雄的な人間性が露呈する。本作は男性中心主義的な傾向を批判されてきたが、ヘンリーの男性的な自我と女性に対する見解は必ずしも肯定的に描かれず、自己矛盾と偏見を孕むものとして読者へ提示される。ゴシップにおける対話とその偽造の意味に着目することで、本作における男性性の問題を再解釈した。

2. “We are always strangers in a strange land”: Neo-Victorian  
Liminality in Sarah Moss’s *Signs for Lost Children*

諏訪 暁 (同志社大学)

Neo-Victorian fiction refers to contemporary historical novels set in the Victorian period, and these novels aim to urge us to reinterpret, reassess, and interrogate the past. *Signs for Lost Children* (2015), Sarah Moss’s neo-Victorian novel set in the 1870s, focuses on the two protagonists’ in-between status to examine the politics of gender and identity. Shortly after their marriage, Tom Cavendish and Ally Moberley begin a six-month period of separation due to Tom’s work assignment in Japan as a lighthouse engineer. While Tom observes Japan from a standpoint of a foreigner, Ally works at an asylum in Cornwall as a doctor (In *Body of Light* (2014), which precedes *Signs for Lost Children*, Ally becomes one of the first generation of female doctors in the UK). The narrative of *Signs for Lost Children* centres on Tom’s and Ally’s sense of alienation: Tom is in Japan in the Meiji era (1868-1912), when there were few British people in Japan, and Ally is a female doctor working in an asylum, which was rare at the time. Both Ally and Tom are depicted as being in a transitory state, situated in “different” spaces, which calls into question their sense of identity and consequently the nature of their marriage. In *Signs for Lost Children*, there are a variety of spaces that could be categorised as heterotopias (to use Michel Foucault’s concept), that is, spaces that which allows Tom and Ally to deviate from and at times disrupt society’s norms. Through analysing the two characters’ sense of placelessness, this paper will explore how heterotopic spatiality in *Signs for Lost Children* serves to help us investigate the social construction of gender and identity in Victorian Britain. Also, this paper would like to argue that neo-Victorian fiction itself can be considered heterotopic, serving as a tool to revise the way we interpret the past and the present.

## II シンポジウム

### シンポジウム1

19世紀出版文化とユニテリアン・ネットワーク—— Harriet Martineau  
を中心として

司会：関田 朋子(日本大学)

印刷技術と流通システムの進歩と読者層の広がりを追い風に、19世紀英国の出版業界は急速に拡大・細分化していった。本シンポジウムを行った2022年に生誕220年を迎えたHarriet Martineau(1802-76)は、このような出版文化を象徴する作家であろう。彼女は、原罪を否定し科学と人間に大きな可能性を見るがゆえに教育を社会改革の鍵と考え、出版業界に携わる多数の知識人を輩出したユニテリアンの出身である。また女性の公領域での活動が限られていた時代に、彼女の執筆活動が経済・歴史・文学・教育・医学など多岐に渡り、著作物の発表形態も多様であったあることを考える上で、ユニテリアンのネットワークは看過できない。本シンポジウムは、その先駆的存在であるAnna Laetitia Barbauld(1743-1825)から論を始め、Martineauの1850年代までの活動を焦点として、19世紀出版文化におけるユニテリアンの出版者と著者等の知識人仲間のネットワーク及び読者との関係性を読み解こうとする試みであった。

### 1. アナ・リティシア・バーボールドと出版文化——何をいかに公にするべきか

報告：梅垣 千尋(青山学院大学)

ハリエット・マーティノーにとっての「母」的存在といえるアナ・リティシア・バーボールドは、18世紀末から19世紀初頭にかけて非国教徒の文化的ネットワークの中心近くに位置し、詩集や児童書など多彩なジャンルの出版活動に携わった。本報告では、とくに彼女が1790年代前半にかけて、実名を明かさずに複数の政治パンフレットを発表した事実に着目し、女性である彼女が、男性を中心的な担い手とする「政治」という領域の出版物

において、どのような自己呈示の方法を望ましいものとみなしていたのかを考察した。彼女の作品であることがそれとなく示された宣伝広告や、筆名に込められた複雑な含意を分析した結果、そこから浮かび上がるのは意外にも、彼女が実名を伏せた理由が、かならずしも伝統的なジェンダー秩序から逸脱した女性としての社会的制裁を恐れたためではなかったという可能性である。むしろ筆名を用いた二点の政治パンフレットについては、その自己呈示の方法が、読者の側を思考停止にさせないための仕掛けとして積極的に選び取られた可能性が高いことを、本報告では明らかにした。

## 2. *Illustrations of Political Economy* (1832-34) とユニテリアンの知的伝統 報告：大竹 麻衣子 (桜美林大学)

経済学の原理と有用性を解説したシリーズ *Illustrations of Political Economy* は未曾有のベストセラーとなり、当初無名だった Harriet Martineau を一躍、国民的な著名人にした。本報告は、まず、この作品がもたらした反響はその重層的な新しさに起因していたことを示した。経済学を物語仕立てで解説した斬新さはシリーズの成功の大きな要因になったが、経済学を様々な社会問題への新たな万能の解決策として提示した点は、リベラル派に支持された一方で保守派から批判された。また、政治や経済について公然と論じ、ジェンダーによる暗黙の執筆領域を侵したマーティノーは「女性らしくない」と攻撃された。

次に、これら賛否両論の新しさを育んだ土壌として、若きマーティノーが信仰したユニテリアンの知的伝統と人的ネットワークとの関係を考察した。教義の土台をなす David Hartley (1705-1757) や Joseph Priestley (1733-1804) の道徳哲学はマーティノーの経済学に対する見方に影響を与え、宗派の機関紙 *Monthly Repository* での経験はジェンダーに縛られない執筆活動の土台となった可能性を示した。

### 3. Harriet Martineau と Eliza Meteyard ——ジャーナルと交差する人間関係

報告：閑田 朋子(日本大学)

Harriet Martineau と Eliza Meteyard (1816-79) がそれぞれジャーナリストとして駆け出しの頃に寄稿した *Monthly Repository* と *Howitt's Journal* は、どちらもユニテリアン派と関係が深い雑誌であった。また二人には多くのユニテリアンの共通の知人がいた。彼女たちが、社会派の進歩的作家として独り立ちするには、ユニテリアンの雑誌と人的ネットワークが不可欠であったのだ。

しかし、二人のデビュー時期には20年以上の差があった。Martineau は1822年からほぼ10年に渡る *Monthly Repository* への寄稿を通してじっくりと経験を積み、Meteyard がデビューした1840年代半ばには、押しも押されぬ人気作家になっていた。一方、Meteyard の初期の寄稿先であった大衆向上雑誌群は、当時力をつけていた娯楽誌に負け、5年以内に次々に廃刊になっていった。本報告は、二人の初期の寄稿先と出版業界におけるネットワーク作りに焦点を当て、それによって当時のユニテリアンの人的ネットワークと雑誌の関係性をジャーナリズム業界の趨勢のなかで読み解くことを目的とした。

### 4. Harriet Martineau と *The Westminster Review*

報告：松本 三枝子(愛知県立大学)

ユニテリアンの Harriet Martineau は、非国教会派として政治的にも社会的にも差別された経験を持っていたため、社会改革意識が極めて高い人物であった。ベストセラーとなった *Illustrations of Political Economy* においても、様々な政治・社会改革の必要性が具体的に解説されている。そのような彼女にとり、急進派の *The Westminster Review* は、自らの意見表明を行う理想的なプラットフォームであり、その寄稿依頼を『自伝』でも詳細に語っている。特に、John Chapman が編集長であった時代には、経営破綻を救済

するために、資金援助をして抵当権を獲得している。ところが、チャップマンが読者層を獲得するために、編集方針を保守化したことにより、彼女の当誌への評価は激変した。

彼女のライフワークである奴隷制廃止論を焦点として、彼女が当誌に書いた“‘Manifest Destiny’ of the American Union”を詳細に分析することで、なぜ彼女が *The Westminster Review* から、それまで軽視していた *The Edinburgh Review* へと、意見表明のプラットフォームを変更したのかを考察した。

## シンポジウム2

### ヴィクトリア朝イギリスの家族——周縁的家族と〈親子分離〉

司会：森本 真美(神戸女子大学)

外で稼ぐ夫と家庭を守る妻、両親に慈しまれる子どもからなる近代家族モデルは、本来白人中流階級という限定的な社会層の価値観を体現したものであったが、その影響力は本国の労働者階級や帝国の被支配民族といった周縁的階層にも及んでいた。親を失った子の苦境は同時代文化のポピュラーなモチーフであったが、そこで親子の離別が偶発的な「悲劇」として表象されるのも、この観念に由来する面がある。

現実には、周縁的階層の家族が様々な理由から親子の一方の不在状態を経験することは、まれではなかった。本シンポジウムでは、若年の子と親が離れて生きる状態を〈親子離隔〉と定義し、その具体的事例の分析を試みることで、より広範な社会層の家族観念と実相を明らかにするとともに、現代イギリスの問題にもつながるジェンダーや移民、エスニシティの要素をも視野に入れて多角的に検証する。

## 1. 奴隷貿易と親子の隔離——シエラレオネの解放アフリカ人たちの記録から

報告：並河 葉子(神戸市外国語大学)

奴隷貿易では、成人男女だけでなく、子どもたちも「商品」として取引されたが、その際、彼らの家族関係や親子関係は考慮されることがなかった。つまり、奴隷貿易は必然的に親子の隔離を伴った。1807年のイギリスの奴隷貿易廃止以後、奴隷貿易撲滅のためにイギリスが行った海上封鎖により、多くの奴隷たちが海上で解放された。彼らを解放アフリカ人と呼ぶ。彼らは、シエラレオネに連れてこられた後、イギリス系のミッションがキリスト教布教の一環として基礎教育を行った。その後は徒弟や海軍に入隊させられたほか、契約労働者として西インドに送り込まれたりした。

イギリスは、シエラレオネで「文明化の使命」を掲げてキリスト教的家族規範の移植を目指したが、これは、アフリカ人たちにとっては自身の家族の離散を前提とするものでしかなかった。しかし、当時この問題に目が向けられることはほとんどなかった。

## 2. 「救済」がもたらしたもの——チャイルド・リムーバルと被支援家族

報告：森本 真美(神戸女子大学)

本報告では少年犯罪者の監護措置としての親子隔離をとりあげた。18世紀末以来、法や規範から逸脱した周縁的階層の子どもの矯正・感化には、「悪しき親」から子を引き離す「チャイルド・リムーバル」が一貫して求められた。矯正・感化の目標は、子どもが経済的に自立することであり、子ども自身やその家族にも親子の隔離は当然視されていた。世紀中期以降、雇用の変化や初等教育の普及によって労働者階級の子どもの期は変容し、近代家族モデルに倣った親子のあり方も受け入れられていったが、少年犯罪者の処遇については、犯罪学などの新しい科学の裏付けも得て親子隔離の方針が維持された。「あるべき親子関係」とともに労働の担い手をも喪失した親たちが、子ども移民をはじめとする隔離措置に強く抵抗した事例は、



子どもの保護という意識の急速な高まりと、下層労働者階級の生活実態やその家族観との軋轢を示している。

### 3. 母親の移民後に——西インドの「残された」子どもたちと家族再結合をめぐる

報告：奥田 伸子(名古屋市立大学)

本報告は、1950、60年代に西インドからイギリスへと移民した女性の子どもの対象とする。当時、イギリスでは「幼児は母親が育てるべき」とする考えが支配的である一方、西インドでは子どもの養育を母以外の人に託す「チャイルド・シフティング」が行われていた。そのため女性は子どもをおいて移民するが多かった。残された子どもは何年か祖母などに育てられた後に渡英して母(両親)と再会した。報告は、親子離隔と再会を経験した人がこの経験にたいしてどのような感情を抱いたかを、全く異なった感情を抱いた2人の女性の自伝と回想録を中心にあきらかにする。彼女たちの語りは必ずしも「親子の別れの悲しみと再会の喜び」という物語には回収されなかった。離別後「他人」となった両親とのイギリスでの生活は心理的に困難である場合が多かった。地理的移動のみならず、異なった家族像が支配的である社会への移動でもあった西インド出身の子どもの移民の経験は、第二次世界大戦後イギリスにおける興味深い感情史のテーマである。

### 4. 文学における親子離隔の表象

コメンテーター：川津 雅江(名古屋経済大学)

シンポジウムのコメントでは、イギリス史研究者による三つの報告を補う形として、18世紀からヴィクトリア朝時代までの文学における親子離隔の表象を通観した。とりわけ児童文学ではほとんどの場合、三報告と同じように、ヴィクトリア朝の白人中流階級の理想の家族像の周縁に位置する

家族出身の子どもを扱っている。そこで、まずイギリス最初の孤児の児童書『リトル・グッディ・トゥーシューズ物語』(1765)をとりあげ、ロマン主義時代やヴィクトリア朝時代の孤児物語との共通点と相違点を指摘した。そして比較のために、ヴィクトリア朝時代からは、「伝道用パンフレット協会」によって出版された『孤児の友だち』(ca. 1842)と、シャーロット・エリザベス・ポーエン『世話される子たち—あるいは放浪の孤児たち』(1881)を考察し、19世紀後期までには中流階級の理想の家族像が、労働者階級にとっても理想になっていたことを明らかにした。

### III 特別講演

ウォルター・ペイターの「ギリシア」——神話から悲劇へ

宮城 徳也(早稲田大学)

ペイターは『ギリシア研究』の諸論考で、神話と悲劇作品を論じ、彼の関心は「死と再生」へと集約されている。ディオニュソスに関して、彼はザグレウスへの連想を強調したが、この神は前5世紀までに叙事詩、悲劇の諸断片に名が挙げられている。後世に同一化されるディオニュソスとの同定は難しいが、悲劇『バツカイ』の作者エウリピデスの断片ではディオニュソスとの類似も見られ、『バツカイ』の台詞「わが主こそは狩人(アグレウス)」が、ザグレウスを類推させることから、ペイターが「狩り」のイメージに注目して、ディオニュソスの背後に、「死と再生」を想起させる狩猟神ザグレウスの存在を意識したのは卓見と言えよう。詩的修辞に満ちた論考からの、学術的な直接の影響は考えにくいだが、ニーチェの『悲劇の誕生』をも産んだ同時代の精神が、次の世紀のケレーニイ、ジャンメールなどの研究成果に引き継がれることには貢献したように思われる。